鑑賞文　短歌を楽しむ (3)

和歌と短歌の違いがわかったところで、では、最近の短歌作品の中から、普段着の思いをのびのびとうたっている歌を紹介してみましょう。

C なんでもない会話なんでもない笑顔なんでもないからふるさとが好き

俵万智『サラダ記念日』

「なんでもない」が三回も出てきます。普通は「なんでもない○○」と表わすと、いかにも何の価値もないような投げやりな調子になってしまいますが、この歌の場合は違っています。

作者は「なんでもない」ことの中に大きな意味を見出しています。ふるさとに住んでいた頃には気が付かなかった、方言のあたたかさや町の人たちのやさしさ。風のさわやかさや陽ざしのやわらかさ。久しぶりに帰郷してみると、そんな自然体のふるさとのすばらしさが身に沁みて感じられたのでしょう。

「なんでもない」が一回、二回、三回と繰り返されるごとに、「なんでもない」の値打ちがぐんぐん上がっていきます。声高に「ここがいいでしょう」と主張するよりも、もっとしっくりと読者の心に訴えかけてくる力があります。

作者の俵万智は、一九八七（昭和六二）年に歌集『サラダ記念日』を出版しました。この歌集は三百万部を超えるベストセラーとなり、大きなブームを巻き起こしました。俵万智の短歌が人気を呼んだ理由はいくつもあるでしょうが、そのうちの一つに、口語会話体（いつも私たちが使っている話し言葉）を自在に短歌に導入したことがあげられると思います。

（中略）

D 「寒いね」と話しかければ「寒いね」と答える人のいるあたたかさ

『サラダ記念日』

「　」付きの会話体をとても自然に短歌に持ち込んでいます。この歌も、どこにでもある何でもない生活の一コマがうたわれています。一人でいると心底寒いのだけれど、作者には「寒いね」と話しかけると「寒いね」と答えてくれる人がいます。相手は肉親なのか友人なのか恋人なのか、それはここでは明かされていません。二人の関係が明示されていないことも、この場合かえって歌にふくらみをもたらしています。

相手を限定しないことによって、読者の中でいろいろな場面が自由に想像できます。恋人でも友人でも、それは誰でもいい。誰でもいいから言葉のキャッチボールのできる人が側にいてくれる。そのことが作者にはうれしいのです。「寒いね」で始まった一首が、最後には「あたたかさ」という逆転でうたい収められる心情の流れが、じつにスムーズに納得できます。

（栗木京子『短歌を楽しむ』岩波書店　による）

確認テスト 本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) **C**の歌に対する筆者の評価として、適当でないものを選びなさい。

ア 「なんでもない」が繰り返されるごとに、「なんでもない」ことのすばらしさがより感じられる。

イ かつては気が付かなかった、自然体のふるさとのすばらしさがうたわれている。

ウ 何の価値もないことのなかにも、あえて価値を見出すべきだという作者の主張が伝わってくる。

〔　　〕

(2) **D**の歌に対する筆者の評価として、適当でないものを選びなさい。

ア 会話体を自然に用いて、どこにでもある何でもない生活の一コマがうたわれている。

イ 関係が明示されないことで、その場にたくさんの人がいるかのように感じられる。

ウ 会話ができる誰かが側にいてくれることへのよろこびが表現されている。

〔　　〕

(3) ――線部「『寒いね』で始まった……心情の流れ」とあるが、ここで説明されている心情の流れとして適当なものを選びなさい。

ア 「寒いね」から始まるのに、その言葉に答えてくれる誰かがいることに「あたたかさ」を感じたという心の動き。

イ 相手を限定した発言ではないのに、それに答えてくれる人がいることで関係が深まるという心の動き。

ウ 場面が自由に想像できるのに、「寒いね」と答えてくれるということから歌の場面が明示される心の動き。

〔　　〕